



Title	日本語可能表現の諸相と発展
Author(s)	渋谷, 勝己
Citation	大阪大学, 1990, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/37255
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍)	渋 谷 勝 己
学位の種類	学 術 博 士
学位記番号	第 9315 号
学位授与の日付	平成 2 年 8 月 10 日
学位授与の要件	文学研究科日本学専攻 学位規則第5条第1項該当
学位論文題目	日本語可能表現の諸相と発展
論文審査委員	(主査) 教授 徳川 宗賢 (副査) 教授 佐治 圭三 助教授 真田 信治

論文内容の要旨

本論文は、日本語の可能表現を分析の対象に据えつつ、言語変化のメカニズムを具体的な資料に基づいて考究したものである。日本語の可能表現は、(1)歴史的にまた地理的に見て多彩な形式によって表されること、(2)デキルや可能動詞などの単なる述語形式のみではなく、格パターンを含む文全体が表現の成立にあずかることなどの点で、言語変化のダイナミクスを探るのに最も適した表現領域と考えられる。全体は「はじめに」「結語」のほか、3部25節で構成されている。

第1部では、現代日本語の可能表現(可能文)が、形式・統語構造・意味・語用論・バリエーションなどの各レベルにおいて持つ特徴を明らかにしつつ、第2部の歴史的研究と第3部の地理的研究に必要となる共通の枠組み(参考枠)を設定する。

意味的な特徴を議論した第4節では、結論の一つの前提として、特に、心情可能と自発(外的強制条件可能)を両極に、またその中間に三つの基準点(能力可能・内的条件可能・外的条件可能)を持つ「可能の条件スケール」を新たに提唱する。このスケールは、各地方言における可能の意味の分節状況を記述するだけでなく、可能表現の歴史的な展開を考察する上でも極めて重要な役割を果たす。

第2部では第1部で設けた枠組みにしたがって、現代日本語の可能表現をもたらした歴史的な変遷過程を文献調査に基づいて明らかにする。セクションI「時代別可能表現の記述的研究」とセクションII「可能表現の史的研究」にわけられる。

セクションIでは、上代語・中古語・中世語・江戸語の可能表現を各レベルにわたって記述し、その特徴を前代との違いに注目するかたちで明らかにしていく。セクションIIでは、まず本論文が採用する言語変化のモデルを明らかにし、レベル間の運動現象にも注目しながら、セクションIの分析結果を時間軸に

沿ってながめていく。

形式と意味のレベルに関する議論では、可能形式の消長をまとめた上で、まず、副詞エの衰退過程と副詞ヨーの発生過程、および可能動詞の発生過程という、議論の多い三つの形式の問題を取り上げて検討する。そして、その結果に基づいて、（1）可能表現の変遷過程には院政期から江戸時代まで続く〔自発形式（（ラ）レル・カナフ・ナル・デキル）の可能表現化の流れ〕と、江戸中期から始まる〔他の意味分野を表す形式との形式的対立保持の流れ〕があることを述べる。前者についてはさらに、（2）自発形式が可能表現化する過程には、可能の条件スケールを右側（自発）から左側（能力・心情可能）へ意味領域を拡大、移動させてくるという一般的な傾向があることを指摘する。また（3）形式的対立保持の流れは可能動詞やデキルを発生、伸長させるのに重要な役割を持つ流れであることを論じる。

統語構造のレベルに関する議論としては、助動詞（ラ）レル・カナフ・ナル・デキル・可能動詞による可能文は、願望文などとは異なって、江戸後期まで対象を表示するのに一貫してガ格を用いていたことを明らかにし、ヲ格をも用いるようになったのは近年の傾向であることを指摘する。そして、そのような傾向が生じたのは、（1）副詞エや補助動詞エルなど本来的な可能形式による可能文がその対象を表示するのにヲ格を用いていたことを考えれば、〔自発形式の可能表現化の流れ〕が文全体にわたって徹底したま、および、（2）受け身との〔形式的な対立を保持しようとする流れ〕がやはり文全体に及んだためであると説明することができるなどを論じている。その結果、形式・意味レベルに起こった変化が、その形式を用いた文全体の統語構造にまで波及する場合があるということが明らかになる。

可能表現の文体的な特徴については、ある可能形式が口頭語で衰えると次代にはそれが文章語として用いられるようになるという「文体上昇の原則」があることを見出している。

語用論のレベルについては、他のレベルとは異なって、通時的な変化が見られないことが検証される。現代語の可能表現はある条件下では「ここではタバコは吸えません」のように語用論的に許可・禁止表現の一翼を担う場合があるのであるが、このような特徴は実際には各時代を通じて指摘することができ、現代語の可能表現に限られていないことを明らかにしている。

続く第3部は、中央語も含めて可能形式の全国分布の成立過程を明らかにすることを目的とする。

まず準備作業として、（1）外的条件可能と能力可能という可能表現の二つの意味領域（五つの基準点を持つ可能の条件スケール上では右左からそれぞれ二番目にある）に対して、各地の方言が用いている可能形式の全国分布のありさまを概観するとともに、（2）ことばの乱れとして取り上げられることの多い見レル・来レルなどの一段動詞やカ変動詞から派生した可能動詞の問題を取り上げて、その起源や語彙的伝播・社会的伝播の実態を分析する。次に、この準備作業の結果をふまえて、外的条件可能形式と能力可能形式の全国分布が成立した過程を個別的に明らかにする。また、局所的な分布を見せる可能形式について整理する。

第3部第24節は、本論文全体のまとめである。先行する各節で個別的に考察した全国分布の成立過程に、第2部で文献をたどることによって明らかになった中央語における可能表現の変遷過程を加えて、可能表現体系の全国分布をもたらした変遷過程の全貌を示す。ここでは、（1）新宮方言を除いてすべての方言が〔自発形式の可能表現化の流れ〕を経ていること、（2）中部地方以西の西日本では〔自発形式の

可能表現化の流れ)が外的条件可能にまでしか及んでいないことが多いこと、逆に関東を中心とする東日本ではそれが能力可能にまで及んでいることが多いことなどを明らかにする。また、(3)可能形式の全国的な分布が成立する過程には、「中央語が新たな変化の流れを生み出し、周辺に位置する方言がそれを過剰に一般化する(推し進める)」という一般的な傾向があることを指摘している。

最後に、結語において残された問題についてまとめて、本論文を終える。

本文、注、資料、参考文献 計233ページ(1ページ:39字×35行)。

400字詰換算 約700枚(1ページ3枚として換算)。

地図9点、図表22点本文中に挿入。

論文審査の結果の要旨

本論文は、上代以降の日本語可能表現の歴史的展開の跡をたどり、過去に起こった変化が「どのようにして」また「なぜ」起こったのかを、緻密な実証作業によって明らかにしたものである。可能表現を、複数の可能形式とその統語構造によって構成される体系としてとらえ、一貫した変化の流れのもとに分析を展開することによって、可能表現の研究のみならず、日本語ないしは言語の歴史的な研究一般にとっても新たな知見をもたらしたものとして高く評価される。

評価すべき第1の点は、本論文によって解明された可能表現の全体像に存する。従来、可能表現に関しては、中央語と方言をそれぞれ別個の研究対象に据えて、共時的研究と通時的研究が互いに脈絡なく行われることが多かった。筆者は、それら個々に行われた研究を総合するとともに、新たに見出した豊富な知見を加えることによって、これまで不鮮明であった日本語可能表現史の総合的全体像を詳細、明確に描き出すことに成功している。

評価すべき第2の点は、第1の点と関係するが、その視野の広さである。このことは、(1)地理的また歴史的に把握し得るすべての体系を議論に持ち込んだ「時空的包括性」および、(2)形式と意味だけでなく統語構造や語用論的特徴・バリエーションなど、可能表現が関与する様々なレベルに配慮した「レベル的包括性」によって明らかである。以上の二点は、研究目的を、複数のレベルにまたがる「文法現象」の歴史的・地理的な「変遷過程」を解明することに設定したことから必然的に要請されることではある。しかし、これまでのところ、文法の史的研究といっても、実際には意味をできるだけ排除して個別的な形式の消長だけを取り上げることが多かった。筆者はその限界に果敢に挑んで、この分野の研究に新たな分析方法を持ち込むことに成功している。

評価すべき第3の点は、議論のための枠組みの手堅さである。本論文のように多彩な体系を統一的に分析することを試みる研究の場合には、議論の基礎となる枠組みが堅固でなければ研究に破綻を招く。本論文では第1部(約60ページ)を後続する議論のための枠組みを設けることに費やして、可能表現を歴史的・地理的に分析するための堅固な地盤を築き上げている。しかもその中には、可能表現の意味体系を連

統的にとらえるための「可能の条件スケール」や、潜在系可能の形容詞化の度合をはかるための基準など、記述研究としても十分評価されるべき成果が多く織り込まれている。

評価すべき第4の点は、言語変化に対する説明の一貫性である。言語変化の説明は、ともすればその場限りのアドホックなものに終わりがちである。しかし、本論文では、可能表現に起った史的変化を説明するために、（1）日本人の思考パターンに由来し、安定した体系を破壊してまで働く〔自発形式の可能表現化の流れ〕と、（2）その流れによって破壊された体系を再び安定したものに導こうとする〔他の意味分野を表す形式との形式的対立保持の流れ〕の二つの流れを想定し、可能動詞やナル・デキルの発生、伸長といった、一見互いに独立して起ったかに見える変化を、この二つの流れの中に有機的に位置付けて論じている。しかも、その説明範囲は可能形式に起った変化だけにとどまらない。対象をマークする格助詞の変化についても、同じ流れによって説明がなされている。その結果、本論文において、可能表現の史的変化に対して提起された説明は、個々の現象に対して個別的なされた説明よりもはるかに強い説得力を持つに至っている。

以上、本論文の優れた点を述べたが、一方では本論文には若干の問題点も認められる。たとえば可能表現の内部においては包括的な議論がなされていても、そこで得られた結論が、他の表現領域とどのようにかかわるのかは明らかにされていない。すなわち、言語変化の一般的なメカニズムを解明しようと試みても、可能表現を分析して得られた結論にはおのずからその適用領域に限りがあるわけである。また、可能表現の歴史的な記述や地理的分布に関する記述に粗さが目立つ部分がある。特に18世紀後半以降の上方語と九州・沖縄方言の可能表現については、資料が十分でないことから、実証が論理に追い付かないに見えるところもある。しかしながら、これらの点は、いずれも今後、研究領域を拡大、深化することによって精度を深めるべき問題であり、本論文が示した達成度を損なうものではない。

以上のように、本論文は従来の研究の水準を越える優れた論考である。学術博士（課程）の学位申請論文として十分の価値を有するものと認定する。